

詠む広場

毎日俳壇

井上 康明 選

片山由美子 選

小川 輕舟 選

西村 和子 選

そら豆や家族に形あるごとく

直方市 岩野 伸子

△評▽さやに幾つ入っているの
らう。ふっくらした形、大きき
さやに並ぶソラマメは、あたかも
家族のようだ。

日野草きのふのことは忘れけり

狭山市 小俣 友里

△評▽日野草は、日々新たに咲き
継ぐ夏の花。赤や白のささやかな
花が彩り、新しい一日が始まる。
ロープ張る防空壕へ薄暑光

黒潮の洗ふ五月の金華山

仙台市 引地 恵一

万緑の中万緑と気付かざる

北本市 萩原 行博

はた神学塾塾の玻璃を打つ

富士宮市 渡邊 春生

郭公や開かずの門を風の訪ふ

甲府市 清水 輝子

溶接の火花飛び散る父の日よ

真岡市 小川 充

放哉の墓に一本遅桜

高松市 島田 章平

夏雲や水産高校練習船

西尾市 金子 恵美

夜濯や近くに止まる救急車

和歌山 桑原 里美

△評▽救急車のサイレンが近づい
てきたと思つたら、すぐ近くで止
まった。驚きと不安と、夜すぎる
の句としては意外な場面である。
口開けて巣を築きあふ燕の子

山口県 谷口 一好

△評▽子ツバメが大きな口を開け
ているという句は多いが、巣をふ
さぐほどとはユーモラスな把握。
駒音の盤にはりつく黴の宿

東京都 渡邊 顯

かくれんぼ遠く揺るる夏帽子

芦屋市 井上 竜太

緑蔭に配送の荷を積みなほし

大阪 芹澤 由美

自転車の風を切りゆく花樽

安中市 中島 糸

山裾に張り付く家並夏の秋

神奈川 中島やさか

友情を急速解凍せり四月

柏市 来田 千斗

襟足を過ぐる川風夏料理

東京 小栗しづゑ

葉桜や人影の無きグラウンド

磐田市 大石 志づ

山映す水鏡なり夕代田

瑞浪市 岩島 宗則

△評▽ひろびろと水の張られた代
田に夕べの光をとどめた山がくっ
きりと映る。米作りを支えるこの
風景を大切にしたい。

風薫る合唱団のベレー帽

宮崎市 境 雅子

△評▽そろいのベレー帽がすが
がしい。声をそろえる少年少女に
薫風が吹きわたる。

五月富士母は白髪切り揃え

平塚市 小林 耕平

葉柳や疎水にゆるるホテルの灯

吹田市 坂口 銀海

青梅や雨に濡れたる野球場

東京 浦上三九郎

風鈴や山の端にある黒き雲

埼玉 正野 昭信

母の日に小手毬手折り仏壇に

京都市 永田 俊也

城跡のやうな棚田に山の百合

新潟市 松尾 良和

朝掘りの筒湯がく鍋深し

橋本市 米澤 俊江

起きがけに耳を澄ませり花の雨

舞鶴市 生野 叡

幌上げて赤子に見せる眞茂祭

京都市 根来美知代

△評▽1000年以上続く京都の
葵祭の行列を、乳母車のほろを
上げて見せた。赤子の記憶には残
らなくとも、この句は残るだろう。
春の雲少し残して夏立ちぬ

尾張旭市 小野 薫

△評▽暦の上では夏でも、実際に
は春の名残の雲も浮いている。季
節のゆきあいを表した作品。
水音を頼りに歩く蛩狩り

町田市 岡 良

見覚えの日傘の後姿かな

常陸大宮市 笹沼 實

雨音のふたたび強し桐の花

津山市 森下 弘

道草もけんかも映し植田かな

高知 渡辺 哲也

全集の一書逆さま寺山忌

北本市 萩原 行博

風車子どもが持てば元気よく

土浦市 今泉 準一

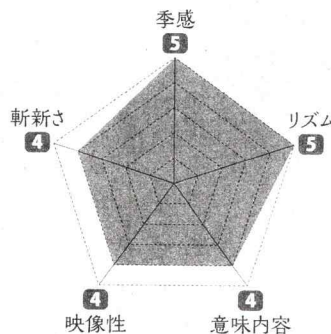
前山も裏山もいま稚の花

和歌山 馬谷富貴子

家朽ちて今年も門の花あやめ

大阪 芹澤 由美

チャートで採点



駅弁は海見えてから夏来る

うた

円堂実花

季語「夏来る」の一句。アプリ「俳句で
ふてふ」の週間ランキングで一位を獲得し
ました。「夏来る」は「立夏」の子季語で、
暦の上でいよいよ夏が来たことを表します
が二十四節気のひとつである立夏と比べ、
夏が来たなあという実感をより強調したこ
とと云えるでしょう。
上五、中七の「駅弁は海見えてから」が、
さりげなくさまざまな情報を伝えます。作
者が駅弁を買って列車に乗っていること、
途中で海沿いを走る路線であること、景色
が見える時間帯であること。夏の到来を告
げる季語が、明るい日差しにきらめく海を
思わせ、美しい景色を見ながら食べる駅弁
への期待感とも響き合って、しっくり働い
ています。
(えんどう・みか「俳人」)

アプリ

俳句でふてふ

全国景勝地俳句コンテスト 俳句でふてふは富士五湖や耶馬溪など133
景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930(昭和5)年に高浜虚子選で実施
した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星
野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。



アプリのダ
ウンロード
はこちら